

追悼碑をめぐる軋轢にみる記憶の衝突

——福岡県飯塚市「無窮花堂」を事例として——

九州共立大学 大和裕美子

1 目的

1990年代以降、日本各地で追悼碑を建立する運動が展開された。各地の追悼碑は、日本で命を落とした朝鮮半島出身者を日本の植民地支配犠牲者として位置づけ、反省を碑文に刻み追悼する目的で建てられた点で共通する。それら追悼碑の撤去や碑文の修正を要求する団体とそれに抵抗する建立団体・支援団体とが対立する現象が各地で生じ始めたのは、2010年代に入ってからである。

この現象につきのような問いが生じる。2010年代になぜ追悼碑反対の動きは顕著となったのか。その土壌はいつどのように形成されることになったのか。じっさいに対立はどのように構図を描いているのか。この問題に関わる人びとは、追悼碑についてどのように考えているのか。地域社会の文脈とはどう関係するのか。

本報告では、まず各地における追悼碑をめぐる軋轢という現象を概観したのち、ある事例に焦点を当て、記憶が衝突する様相を描き出しながらその実態を探ることを試みる。

2 方法

本研究では、追悼碑をめぐる衝突という現在進行の現場に入り込みながら実証研究を行う。事例として取り上げるのは、福岡県飯塚市の納骨型追悼碑「無窮花堂」である。なぜ「無窮花堂」は攻撃の対象となったのか。「無窮花堂」への攻撃は、旧採炭地である筑豊という地域社会の文脈とどのように関連づけられるのか。本報告では、飯塚市議会の会議録や関係者へのインタビュー資料などを用いながら、「無窮花堂」をめぐるこの地域で生じている動きを分析する。

3 結果

分析の結果、「無窮花堂」をめぐる攻防の構図と各団体の性格が明らかになった。「無窮花堂」の碑文修正を要求するおもな団体は、「国際交流広場の正常な運営を求める会」や「早乙女会」という団体で、「無窮花堂」を建立した「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」をもとに、建立後新たに立ち上げられた「NPO 法人無窮花友好親善の会」が応戦し、この団体を「強制連行を考える会」（筑豊）、「長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会」（宇部市）などが賛助団体として支えているという構図である。

「無窮花堂」の批判する団体を調査した結果、「無窮花堂」の碑文修正を要求するという点では共通するものの、それぞれの団体に直接的な接点はないこと、また各団体の性格（構成員の年齢や居住地、批判活動の展開方法、「無窮花堂」の批判以外の他の問題への関心や関わりなど）は異なること、また両者のあいだに直接的な接点はなく、面識もないことが明らかとなった。「無窮花堂」への攻撃に抵抗する諸団体が連携を密にし、構成員にも多くの共通点がみられるのとは対照的である。

4 結論

以上から、「無窮花堂」をめぐる「植民地支配を反省する記憶」を表象する追悼碑をめぐる軋轢の場において、その撤去や碑文の修正を要求する団体とそれに抵抗する建立団体・支援団体との対立という記憶の衝突の構図と団体の性格とその特徴が明らかになった。今後は、共通しながらも性格が異なる「無窮花堂」を批判する団体の人びとの意味世界に、さらに接近していくことが課題である。